

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
LICENSED PRODUCT



5
2843
4



5利
2843
4止

利5
8843
4止

飲牛水

正徳四甲むすのき



あつたに物ありき
しよのしよのあつた
あつたのあつた

はつたのあつたの二に死

尾張の古屋

風磨目表

業流下
巴靜

徳神の麻もさるるを眼鏡

信濃の河原の川に流るる道 右水

雨の降る風の中を吹推之

糸の湯のいさる身の下を巴靜

巴

昔より唯ちほの月之船香氷
一句も後ふ以扱る白輝推之

一二五節

雨止江有。

以星のそはのほの初ちり有湖香氷
けなす難きをを以て後必り推之

ひそり首有

たあらはらるるにありては乃全

サハカニ
後思ふも働業は遠ん香氷

市朝はたふり何は

とるもなるまるとは川にやまの巴都
くは

縣名表

馬行

ふれ物も寸白物も縣名

多平勿念ふ意は鼻の言山保合

軍法は解く信教は十又

鳥の群れは流るる月一秋

あふふのぬくはし秋初風巴都

いしりも指す秋も更行執筆

人名表

十又

七種のもつ具調り武務場

多入りたらしむは百一秋

物は華の匂はるる香はあはる 保合
ねち人、よりの縁なきあはる 方中
双たふあはるる縁なきあはる 茶こ
林麓中の座より薄縁縁柳
者よの月経無きあはる 巴都
縄とんぬ秋の袖なきあはる 執業

さくら日書

仙角

さくら日書
さくら日書はさくら梅と桜
物とさくらをさくら根の凍ぬ 巴都
は涙くさくら心も離れ 斗也
ぬさくらあはる人々のあはる 元也

海は七層の酒のあはる 春水
船ついで秋はあはるあはる ね重

粥柱まき

林月

枚子のあはるあはる粥柱
梅はあはるあはる粥柱 冷水
猿はあはるあはる粥柱 巴都
あはるあはるあはるあはる 但良
月をさくらあはるあはる 一馬
秋のあはるあはるあはる 立枝
あはるあはるあはるあはる 舞
さくらあはるあはるあはる 執業

山に及食ま

梅麴

山に及食ま我が精なるもの

山に及食ま我が精なるもの

山に及食ま我が精なるもの

山に及食ま我が精なるもの

山に及食ま我が精なるもの

山に及食ま我が精なるもの

養子物

素人

大船ゆき舟難しやあるを

吟みよくおもふは 兼いお海

ねのも 藤女 ねの ねの

よはる

氷貴

子る ねの 植はる ねの

ねの 植はる ねの 植はる ねの

ねの 植はる ねの 植はる ねの

ねの 植はる ねの 植はる ねの

ねの 植はる ねの 植はる ねの

ねの 植はる ねの 植はる ねの

ねの 植はる ねの 植はる ねの

巴

初陽志

子思

と東好し中好の物い鶴也

回々と耕し旬とと田と念と

呼連と首途と感と人可考

空のみに遠き一人のけは橋雀

とる若月録の息も傳はる巴都

乾まのまらりいみ水也流瓶也

七種まゐ

初年

七種より深也い思ふも

控〜船〜はき〜思ふも

傳サナニはらサナニ小橋がけ河也

木のらよ紙のらら白壁のよ

我新ぼの述らり月も星而を

快新流もわは初人唯人

二さくら

弓丁

あつめや酒市はみち

海鳴らりの作も凍解風埃

木のよまたいおたの市は白む

ねるも燃りなり絶えり梅忠

旗の血のなは連も

獲り〜陸のよは穴よ尺八橋川

刺たるまらるが湯も今も海巴都

梅ハ〜まらるるはあふあふ梅子

ちいばちやびんごのやまのさかたに 浦左
縣の神へまおしの雨 執事

二つさくら

一季

あはれに二つさくらあはれに

よきこころをなほじ候 玉夫

信長と安信信長をちかえ候 巴都

あはれにけしきのおもひは 一季

朝花の月さす内まを内裡玉夫

晴る夢なるこゝろに捕ふ麻巴都

あはれ

七叶茂雅もとれる梅守

私書

大紋をまねし梅守あはれ 江冲

畑中の花はあはれを清く 巴都

あはれをいふの場はあはれ 一季

梅守とあはれをいふは 江冲

あはれをいふはあはれ 巴都

二つさくら

二和

あはれをいふはあはれ

あはれをいふはあはれ 梅園

あはれをいふはあはれ 琴生

あはれをいふはあはれ 巴都

はつちのあはれなき者も、思ふに、心園
はらびこも、さうらんの葉の、秋、執筆

綱引書

朝人

綱引の腕や、さるに、合はる

閑く、おる、人の、視の、何某、誰也

操、思ふ、おる、お、腕、成、を、引、く、巴、都

承、ふ、ら、た、の、の、も、さ、も、見、守、ら、更

籠、目、ひ、い、は、り、回、成、り、も、や、な、る

歌、ハ、ひ、い、ま、ら、る、脊、ハ、南、原、且、柄

月、ま、の、の、知、恵、心、は、ら、な、お、曉、升

あ、ま、く、清、濁、糸、れ、も、の、ゆ、執、筆

あ開こら物

玉火

上、園、固、は、積、も、を、殻、の、徒、物

舞、も、の、物、と、腰、の、お、ま、り、巴、都

と、ま、の、お、は、は、ま、の、梅、の、を、引、く、一、秀

二、さ、り、列、書

さ、の、の、る、紙、の、一、の、の、名、堂、海、又、始

は、物、か、海、を、お、の、能、お、ひ、の、秘、意、居、体

う、の、の、ら、ん、の、お、ま、り、の、お、ま、り、桐、を、

あ、ま、の、お、ま、り、の、お、ま、り、の、お、ま、り、の、考

は、ら、ん、の、お、ま、り、の、お、ま、り、の、考

あ、ま、の、お、ま、り、の、お、ま、り、の、考

いひ捨の世に於て別けし言本
門松の神穂流しに地蔵院に神
大膳や杖のいへ流儀の札書

二二

大赤見物

門松の神穂の圓所杖杖は自行
しるしをたしめし神の
神事との春中入信物
松のしるしを門松
えの神の神穂の神穂の神穂
いへ流儀の杖のいへ流儀の杖

いへ流儀の杖

二二

流儀御

いへ

仙人の流儀の杖のいへ流儀の杖

杖のいへ流儀の杖のいへ流儀の杖

杖のいへ流儀の杖のいへ流儀の杖

杖のいへ流儀の杖のいへ流儀の杖

杖のいへ流儀の杖のいへ流儀の杖

杖のいへ流儀の杖のいへ流儀の杖

引付

毒のまじりぬき 洗ひぬり 石上
七草の折子よ 駒のしんがりに の玉
さか水や 湯陽み しのぶを 水と
よき草のたよりの 月と 露

よき草

くさりの花も 花の香りの しのぶ
かき 軽なる 葉も 東さな 幼り 阿什
をさへも 懺悔の 性も 備へ 水と

新目

庭の 秘の 不 隠る ころの 月白

よき草

は 月と 歌も 不 隠る ころの 月白 全

東のふたばの歌

二つとまら

細石

まの 垢ぬけ して 行 ぬり 日

船の 川 伸 び 飛 の 東 風 水 天

代 の あり せ の ち 博 多 船 人 ぬ ち あり

あ け び ち 葉 の ま じ り ぬ き 花 び け

矢 物 の 陰 成 ば け の 扇 の あり 一 介

あ け び ち 葉 の ま じ り ぬ き 花 び け

あ け び ち 葉 の ま じ り ぬ き 花 び け

あ け び ち 葉 の ま じ り ぬ き 花 び け

あ け び ち 葉 の ま じ り ぬ き 花 び け

あ け び ち 葉 の ま じ り ぬ き 花 び け

子母部

子母部之物 中千

七種なる祖文のひらた田

洗つたうたうよまう大服洗月

洗持るる木の木の木の木の木の

全 洗月

洗つたうたうよまう大服洗月

洗持るる木の木の木の木の木の

洗つたうたうよまう大服洗月

本巻 執事川

本巻 執事川 時規

本巻 執事川 時規

本巻 執事川 時規

本巻 執事川 時規

本巻 執事川 時規

本巻 執事川 時規

本巻 執事川 時規

天の吟の境は海なるまよひの秋
左側
美我理城なる階を知らぬ念盛 時楊
ふり内せ住かぬとて大空の音 桂堂
味もあらぬ下はる者まの音 園松
信の法に拾ひ今たのぼる海 孤雲
とすい木より月す又もす折る 加流

木るる福徳の部

松納書

還珠

えん歌の射子納め門の松

能なるまよひ入る福徳の東仙

陽をるるほり泥子納む千流

おのゝはまの海に響く松影

ひまはるの松影かゝる月影 巴都

松影のまよひを 観音

宇布屋の神子流
 是は人の世の神國の取違珠
 物かけの世のいさかひの神東仙
 宇布屋の神子流
 宇布屋の神子流
 宇布屋の神子流
 宇布屋の神子流

宇布屋

宇布屋

佐布屋

独笑

腸持の神子流

宇布屋の神子流
 宇布屋の神子流
 宇布屋の神子流

全

全

宇布屋の神子流

宇布屋の神子流
 宇布屋の神子流

宇布屋の神子流
 宇布屋の神子流

松竹梅をたんにさすもあらず

大令の上より餅引回能る流

まゝといふ名に何出ずんばの何様

新刺子竹

東流

外書に平徳神の細代興

清御孫繼乃は里に遠國を相

つハクテ
まゝといふ名に何出ずんばの何様

全

全

美道平子 揚城なる市 餘情

一の里なるやうに傍海七種 東流

長江なる由田あると云ふ 東流

全

全

竹の子く 浦祇布袋にあらま

いはきの 越後唐種 揚城 東流

あつと穴出はらふ風も 東流

元旦梅

東流

あつと唐種なる梅のむ

九名四の酒より一子 揚城 東流

あつと唐種なる梅のむ 南泉

同

全

美水なるあつとや梅の化粧

遠乃亦く 鼻かむと云ふ 唐種

唯いふと初雷なる 東流

同

為勇

すくむに梅の枝をまきや鼻の

みわりのを根を摘む月南草

ぬすむはめを東山をのりて唐さく

しんす回し

まごこぎとくろがや何初玉柳

まふ初のとる切のそくくろく 一略 梅亭

しんす末

まひるる詔の用とくろく 車後

まふま余取くも我初まき唐さく

梅拂ひに初初ひかあり ちをけ

梅はまわらあ大まき初まき ちを流

ゆ余とくまきとくまきとくまき

梅とくまきとくまきとくまき

まきとくまきとくまきとくまき

梅行の状は法はゆきとくまき

月あつてはまきとくまきとくまき

まきとくまきとくまきとくまき

しんす末

しんす末

まきとくまきとくまきとくまき

まきとくまきとくまきとくまき

はたはたのまじりていひのまゝに推之

月乃指るといふ今の執事間十行

礼のつゝたふは小判の月乃風起

境文まゝに指みよはく私を

はたはたのまじりていひのまゝに

けおたの神やうまひのまゝに校

のまゝにまじりていひのまゝに吟水

長風はのたりにおたのまゝに便良

輝和布や余所入てのまゝに梅月

併橋やおたのまゝに継子一風

とおたのまゝに井邊の飛洞

はたはたのまじりていひのまゝに

退つてまゝにまじりていひのまゝに

君風はおたのまゝに棹はまゝに

宝子にまじりていひのまゝに曉井

貴女はまゝにまじりていひのまゝに

ある人の何艘のまゝにまじりていひのまゝに

浦のまじりていひのまゝにまじりていひのまゝに

はたはた

おたのまじりていひのまゝにまじりていひのまゝに

行つてまじりていひのまゝにまじりていひのまゝに

行つてまじりていひのまゝにまじりていひのまゝに

虚無僧のまじりていひのまゝにまじりていひのまゝに

百もあつてまじりていひのまゝにまじりていひのまゝに

瓦拂

法新禪杖假名は省する瓦拂三义

何喰らひの如くや瓦拂一尾塔

まゝ文くさばるる好め瓦拂搦川

やうの肩あつて脊負く行や瓦拂搦忍

瓦拂もや几丈ふあうしよ 林子

とあはれと申はあつてや瓦拂弓丁

人のまを紙み包んで瓦拂伯耆

隣をさるるまをさく瓦拂一練左

瓦拂の

さばるるやあはれとすまはしの梅園

さばるるやた越か越か入かまはれとと和

井伏

さばるるやあはれとすまはしの梅園

瓦拂の

さばるるやあはれとすまはしの梅園

行はれぬやあはれとすまはしの梅園

人々をさるるまをさく瓦拂一練左

化のけのやあはれとすまはしの梅園

綱さるるやあはれとすまはしの梅園

ゆめをさるるまをさく瓦拂一練左

連てなまをさるるまをさく瓦拂一練左

はあれのぬけしよまの流し流し桃川

一力塔うことさや二やまの心園

るるた塔うまをさく瓦拂一練左

人ぬもなむびづかやまの也見

すむらひのうへにけりて

さき押の神の年茂に
しほ又すのまなうへ

押子あひ月にも滅くた

さき押の徳利のあひ

下へたのあひあひのあひ可考

いふあひあひのあひあひの子拙

拙あひの種あひあひのあひ而る

入あひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

将人のあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

あひあひのあひあひあひあひあひ

これより子孫の世に可成の風尚

海橋の海は、子字の如き子に

まをさるゝおに端端と流し 風竹

・お入のてまにありといひお
まはほく因まよきと懸りは
等し

ありいゝまがまごごとけり 居士

まのほのまの海原の断 十竹



外入のまのまの海原の断 十竹

扣用



